
かれと怪奇な物語

嘉月菜美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かれと怪奇な物語

【Nコード】

N3148Q

【作者名】

嘉月菜美

【あらすじ】

高校2年の始業式の日、東雲燐しのめりんは朝から目を覚ますと右目がなくなっていた!?

突然起きた怪奇な事件に彼はただ戸惑うばかり。

しかしその事件がきっかけで、彼は次々と起こる怪奇現象に巻き込まれていく。

1話：ひじり無

ようやくこのクラスが慣れ始めた5月始め。

僕のクラスでは席替えが行われた。

結果、僕は窓際から2列目の一番後ろの席という幸運くじを引いた。そして隣は大人しい瀬々羅木聖せせらまきじりになった。

瀬々羅木は一言で表すと”清楚”であり、長い黒髪は今の時期は後ろでポニーテールで束ねている。

制服も着崩す事はせず、校則に沿って着用していた。

1年の時に彼女と同じクラスだった男子の話によると、運動神経も抜群で成績も優秀であるらしい。

そのため先生からも気に入られているという。

「それでは、お昼休憩です」

クラス担任の石本詩織いしもとあきがそう言った。

その言葉で昼休みが始まった。

僕はかなり空腹だったので、急いで鞆からお弁当を取り出した。

『1時に昼食なんておかしい』

ふとそんな言葉が頭をよぎった。

そんな規則に文句を言っていた中学時代が懐かしく感じた。

チラリと横を見ると、瀬々羅木は自分の席からグラウンドを眺めていた。

「お弁当、持ってくるの忘れたのか？」

僕は思わずそんな事を言葉にしてしまっていた。

突然話しかけられて、瀬々羅木は目を丸くしていたが、それも一瞬の事で、すぐグラウンドに視線を戻した。

「お腹、空かなくなったのよ」

彼女はそう悲しそうにポツリと呟いた。

”お腹が空いてない”ならまだ理解できるが、”空かなくなった”

とはどういう事なのだろうか。

彼女の言葉のニュアンスが非常に気になった。

「それ、どう言う事」

「…如何して、東雲燐しのめりんに言わなくちゃいけないの？」

すると先程と口調を変え、僕の顔をしっかりと見つめてきた。

流石にこの台詞を吐かれると、人間は反論できなくなる。

返す言葉が見つからないまま、黙り込んでしまった僕を冷めた目で見た彼女が、この沈黙を破った。

「…胃が、なくなったのよ」

風が止み、辺りが静寂に包まれた。

僕の耳には彼女の声しか聞こえなかった。

彼女の告白は僕の心に重く響いた。

その言葉はあまりにも衝撃的すぎて。

今度は違う意味で返す言葉を失ってしまった。

「だから、お腹は空かないの」

僕はすっかり空腹だった事を忘れ、彼女の言葉に興味津々だった。

真面目な彼女がふざけた話を言うわけがない。

「なんで、胃がなくなっただんだ？」

「…私にだって、わからないわよ」

こんな有り得ない事が当たり前前に起こる。

それはつまり『妖あやかし』が関係している、という事だ。

もしかしたら、僕に協力できる事があるのかもしれない。

そう思った僕は、すぐ彼女に提案をした。

「何か協力できるかもしれない」

その言葉に彼女はしばらく返事を返さなかった。

もしかしたら疑っているのかもしれない。

だから僕は先程の言葉に付け足した。

「僕も、瀬々羅木と同じような経験をした事がある」

そう言うと彼女は少し安堵の表情を見せた。

「わかった。東雲燐、貴方を信じるわ」

僕の思いが少しでも彼女に伝わった事が嬉しかった。

きつと不安だったのだろう。

不可思議な現象が起こったのは自分だけだと思っていたのかもしれない。

人間は”仲間”を見つけると、自然と強くなれる生き物なのだ。

僕はとりあえず今後の事を彼女に話した。

5月3日(日)

毎年ゴールデンウィークは暇だ。

休暇中に遊びに行くような友達もいなければ、家族もない。

しかし今年は違った。

久しぶりに、本当に何十年ぶりかに、この人ごみの中にいる。

瀬々羅木は時間通りに待ち合わせ場所に来た。

彼女は僕が最後に見た日 金曜日に比べて、少し痩せた気がする。

「瀬々羅木、少し痩せたか？」

「当たり前じゃない。食べてないんだから」
なるほど。

と納得してしまっではいけないのだ。

これは『怪奇現象』なのだから。

僕はとりあえず、今から懐かしい場所に向かった。

そこはいつも暗かった。

昼時に行っても、そこだけは闇に包まれているようだった。

そこは、他の場所に比べて空気が変わっている。

不気味で、でもどこか興味をそそられる。

それはまるで恐怖心がありながらも、好奇心旺盛な子供のよう。

だから僕もあの日、彼に付いて行ったのかもしれない。

「ここ、なの？」

瀬々羅木は疑いの目でその家を見つめた。

「あー、うん」

僕は適当に返事を返す事しかできなかった。

僕も最初、彼女と同じ気持ちだったからだ。

こんな廃校に人が住んでいる気配はない。

でも、彼は住んでいた。

門の前に立つと、いつものフクロウが話しかけてきた。

「確認、確認」

僕は右目を覆っている長い前髪を開放的に分けると、右目をゆっくりと開いた。

その赤い、赤い、血の色をした僕の目を見ると、フクロウは相変わらずの口調で話した。

「承認、承認」

僕はその言葉を聞くと、再び右目を閉じ前髪で隠した。

しっかりとその場面を見ていた瀬々羅木は驚いた顔をしていた。

フクロウが日本語を話しているからなのか、僕の右目が赤かったからなのか、わからなかったが。

「その横、誰」

「ああ、こいつは僕の連れ。瀬々羅木、フクロウに向かって話して」

「瀬々羅木聖」

瀬々羅木はフクロウに向かって、ぺこりと頭を下げた。

「承認、承認」

すると固く閉ざされている門が開いた。

中は一本通路になっている。

これがあの男の気分次第で、距離が変わる事になる。

通路はただ真っ暗で、どれくらい歩いたなんて確認できない。

瀬々羅木はきよるきよると辺りを見渡していた。

「いつ、終わりがあるの？」

「さあ、この通路の長さは、あの男の気分次第で変わるから。でも、今日はちよつと長いから、そんなに気分は良くない」

全く理解できてない瀬々羅木の表情は、初めて見るとふと思った。いつもは少し余裕があるが、今は全くと言っていいほど余裕がない。むしろ、僕のほうが余裕だった。

余裕のない彼女は、かなり貴重だと思った。

「東雲燐、さっきの目は…」

瀬々羅木は僕の右目が気になっているようだった。

僕は別に過去の事を隠すつもりはない。

「うん、”妖”ってやつに奪われた」

「あやかし…?」

彼女はキョトンとした顔で僕を見た。

「そう、妖。おそらく瀬々羅木の胃も、妖が盗んだんだと思う」

瀬々羅木には別次元の話のように聞こえているだろう。普通の日常を過ごしてきた彼女だから。

僕も最初、この世界を知った時は驚きを隠せなかった。

だから瀬々羅木の今の気持ちは痛いほど理解できた。

「胃は返ってくるの?」

「ちゃんと交渉すれば」

「じゃあ何で東雲燐の目は返って来てないの?」

「それは…」

僕は言葉を詰まらせた。

瀬々羅木の意見は正当だ。

僕はその日、あの妖から目を返してもらうのを拒んだ。

「妖が、可哀想だったから」

こんな事を言ったら、完全に馬鹿にされる。

自分の目を抉り取られた相手に同情するなんて。

「…そう」

すると彼女の返事は意外なものだった。

「でも、私も感謝しなくちゃいけない」

彼女は自分に言い聞かすように呟いた。
感謝する、とはどういうことだろう。
誰に対しての礼なのか、僕には理解できなかった。

ようやく長い長い通路の終わりが見えてきたようだ。
どこからか風が吹いている。

それがとても開放された気分になれるのだ。
通路の終わりには扉がある。

それを抜けると、ようやく彼がいる部屋に辿り着ける。

「着いた」

僕は確かめるようにそう言葉にした。

すると部屋から現れたのは、相変わらず黒いシャツに黒のパンツを
穿いて、黒のコートを羽織った男だった。

男は僕の顔を見ると、不気味な微笑みを僕に向けた。

「お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな。知らない間に可愛い子捕まえやがって」

「違います」

男の言葉に僕ではなく瀬々羅木が反論した。

「そんなに僕が彼氏ってというのが嫌なのか」

「嫌よ」

彼女の返答は刹那だった。

今までの優しさは全部演技だったのか！？

半泣きで瀬々羅木を見ると、彼女はツンとした態度だった。

そんな僕たちのやり取りを楽しそうに男は見ていた。

「ははっ、面白い！まあ、燐にあんたは勿体無すぎる」

「そうよ」

なんで2人が意気投合してんだよ！？

もうツッコむもの面倒になり、僕は心の中でツッコミを入れた。

「で、話を進めるけど、まず自己紹介して」

「瀬々羅木聖」

「おう、オレは無邪志^{むさし}ってんだ」

「ムサシ、さん？」

「ああ、そう呼んでくれ」

无邪志さんは相変わらず女には甘い。

だから今もあの妖がこの屋敷に住んでいるのだが。

僕と扱いが違いすぎて、少し虚しくなってくる。

「で、用件はなんだ」

「胃が盗まりました」

瀬々羅木はいつも唐突だった。

これには无邪志さんもビックリしていた。

しかし瀬々羅木本人は平然としている。

「いきなり言われても、ビックリすんだろ！」

「あ、すみません」

彼女は純粹に謝った。

そして本題へ移った。

彼女が胃を盗まれた理由。

どうやら、4月23日の帰宅途中に可愛らしい狛犬に会ったとか。すると胃が盗まれてしまったらしい。

瀬々羅木の説明が終わると、无邪志さんは真剣な顔で彼女に質問した。

「本当に、それだけか？」

「……はい」

彼女は少し躊躇いながらも返事をした。

「オレに隠していることはないな」

「ありません」

无邪志さんはまるで彼女の心を見透かしているようだった。

けれど瀬々羅木もいつになく真剣な瞳を、无邪志さんから逸らさなかつた。

すると今度は、无邪志さんは彼女から僕に視線を向けた。

「なら、いい。悪いが今から仕事だから、また明日来てくれねえか」
「わかりました」

「夜は仕事が多いから、午前中に来てほしい」
その言葉に僕は同じ言葉を繰り返した。

僕たちは无邪志さんに一礼すると、この部屋から退室した。
出るときは通路が短い。

だからすぐ門へ辿り着ける事ができた。

僕は門から出ると、明日について彼女に話した。

「明日は、10時に今日と同じ場所に集合」

「わかったわ」

ところで。

1つ僕は彼女に聞きたい事があった。

ずっとタイミングを逃してきたが、今なら言える気がする。

「あの、瀬々羅木」

僕の言葉に彼女は振り返った。

「ゴールデンウィークは家族で出かけたらしらないのか」

「…そんな余裕なんてないわよ」

彼女は金曜日の告白の時と、同じ表情をしていた。

切なくて、今にも泣きそうな顔。

でも無理して笑顔を作っている。

「そう。それじゃ」

だから僕はこれ以上聞かないでいた。

いや、今の言い方には語弊があるかもしれない。

正しく言うと、彼女のあの表情を見て、聞く事ができなかった。
きっと彼女には隠したい思いがある。

2話：ひじり会

5月4日（月）

10時丁度に瀬々羅木はやって来た。

彼女らしい白のワンピースに薄ピンクのカーディガン姿は、やはり”清楚”だった。

しばらくは2人で街をぶらぶらとして12時に昼食を取ると、僕たちは昨日の場所に向かった。

闇に包まれた廃校に着くと、暗闇の中目を光らせてフクロウが待っていた。

僕はいつものように右目を見せ、彼女は名前を言った。

するとまだ昨日の記憶が残っているのか、フクロウは彼女も承認してくれた。

開かれた門を抜けて、通路から部屋までが今回はとても短かった。

それは无邪志も待っているから。

今日は彼は機嫌がいいみたいだ。

「昨日より通路が短い…」

瀬々羅木はポツリと呟いた。

すぐ通路を抜ける事ができ、僕は重く堅く閉ざされた扉を開けた。

「リンさんっ」

するとそこには待っていた筈の人 无邪志ではなく、白い髪を腰まで真直ぐに伸ばし、頭には耳が生えていおり、左目が包帯で覆われている、いわゆる”妖”が扉の前で待っていた。

彼女は白狐こひつねという名前で、その名の通り狐の妖だ。

僕は彼女の登場を、そこまで驚かなかった。

しかし瀬々羅木は、未確認生物を見るような目で白狐を見つめてい

た。

彼女は言葉が出ないくらい驚いていた。

だから僕が白狐を紹介した。

「こいつは白狐、っていう妖」

「…妖？この子が？」

おそらく瀬々羅木にとつて”妖”は鬼や怪物だと思っていたのかも
しれない。

だが目の前に現れたのは、自分より幼い少女。

その衝撃を受けていたのだろう。

「うん。そして、この白狐が僕の目を奪った張本人」

僕は至つて冷静に説明した。

この狐が、あの日、僕の右目を奪った。

その事件はまた後で話す事になるだろう。

「…憎んでないの？」

「まあ、視力はあるし」

そう、右目の眼球はないが、視力はバツチリある。

これは白狐なりの気遣いなのだろう。

瀬々羅木は有り得ない事の連続で、今にも失神しそうだった。

僕はとりあえず白狐にあの男について聞いた。

「无邪志さんは？」

「どうやらまだ外出中みたいです」

白狐は少し申し訳なさそうにそう言った。

昨日から帰ってきてきてないのか、と訊ねると白狐は悲しそうに頷いた。

ここで待っているのも薄気味が悪い。

日が落ちたのかさえ確認できないこの場所は、僕にとって決して居

心地が良いとは言えなかった。

この屋敷は時間が経ったのかもわからなくなるくらい、僕の感覚を

麻痺させる。

まるで麻薬みたいだった。

それは瀬々羅木も感じていたようで、あまりここで待機するのを望

んでいなかった。

今日は帰ろうか。

その目で瀬々羅木に問いかけると、彼女はこくつと素直に頷いた。するとそれを察した白狐が、僕のズボンの裾を掴んできた。

「…帰っちゃうんですか？」

そんな涙目で言われると、帰りがたくなる。

白狐はあの事件後、なぜか僕にかなり懐いてしまったようだ。

女にここまで甘えられるのは初めてだったが、相手は”妖”である。喜んでいいのか、心が少し複雑な気分になった。

「リンさんに会えて、嬉しかったのに…」

しょんぼりする彼女に「帰る」なんて言えなくて。

僕は何故か「帰らない」と言ってしまった。

横目で瀬々羅木を見ると嫌そうな顔をしていた。

わかってる。僕もこの場所は苦手で、今すぐ帰りたい。

だけどこういう時、断れない人間なのだ。

きつと帰り道で叱られるんだろうな、と心の中で怒られる準備を始めていた。

白狐には満面の笑みで「ありがとう」と言われた。

ここまで純粹だと、なんだか帰るのも悪い気がしてきた。

白狐は「かくれんぼがしたい」と言い始めたので、付き合うことにした。

かくれんぼなんて、何年ぶりだろう。

おまけにこの敷地は広すぎて、見つけるなんて到底無理な話だ。

けど幼い頃に戻れた気分になり、それはすごく楽しかった。

そして結局、无邪志が帰ってくるまで遊びに付き合わされた。

「悪いな、仕事が長引いちまった」

「いいですよ。今からは、もうお疲れですか？」

意外にも謝罪の言葉を入れた无邪志さんに、僕は驚いたのでそれなりの対応をした。

无邪志さんは少しお疲れモードだった。

およそ丸1日、仕事をしてきたのだから無理はない。

「ああ、少し休ませてくれ。お前らもここはしんどいだろう。悪いが明日また来てくれねえか」

无邪志さんは、この独特な空間に慣れてしまっている。

逆に言うと、僕たちが地上で過ごしている空間が苦手なのだ。だから僕たちがこの空間を苦手としているのをわかっていた。

僕は嘘をつかずに「しんどいので明日来ます」と伝えた。

瀬々羅木もその言葉に賛成してくれた。

白狐は最後まで僕の帰すのを嫌がったが、无邪志さんが止めてくれた。

そのおかげで少しは帰りやすくなった。

僕は手を振る白狐に、笑顔で返すと部屋を出て門を抜けた。

瀬々羅木は門を抜けた瞬間、大きな溜息をついた。

「はあ。私、あの場所苦手」

「わかってる。僕もだから」

いつ行っても、何回行っても、あの空間だけは慣れない。

しかし瀬々羅木は昨日今日と2回しかあの場所に訪れていない。

僕より疲れやすいのは仕方がないだろう。

その後は息抜きという事で、近くの喫茶店に入った。

「あれ、霞ヶ原？」

驚く事に、その喫茶店で同じクラスの霞ヶ原すみれがバイトをしていた。

普段と同じく髪はおさげで、服装は喫茶店の制服だった。

どうやら瀬々羅木とは1年の頃から同じクラスで友達らしい。

霞ヶ原も大人しい性格だった。

でも瀬々羅木と違う所があった。

それは瀬々羅木は謎に包まれている、という事だ。

こうやって霞ヶ原は私生活が垣間見えるが、瀬々羅木の場合それが一切ない。

たまに本当に人間なのかさえ疑ってしまう。それくらい彼女には”人間らしさ”が欠けていた。

：まあ、右目が赤い僕に言われたくはないだろうが。

「あ、ひよつとしてデート？」

「違うわ。ただ出くわしただけよ」

え、全然違うんですけど！？

でもここで反抗したら、また倍返して返ってくる。

そんなに僕が彼氏だと思われるのが嫌なのか？

「まあ、そんなとこ」

またややこしくなると思ったので、僕は彼女に話を合わせてみた。

どうやらそれが間違いみたいだった。

「あら、今日は話し合わせるのね」

「え、たまたまじゃないの？」

「ちよつと用事で東雲燐が必要だったのよ」

「へえ、そうなんだ」

話が違う！

僕は口を開く事ができなかつた。

瀬々羅木は僕をはめた、というわけだ。

「でもでも、2人お似合いだよ」

霞ヶ原は妄想が激しい。

どこをどう見たら、僕たちが付き合ってるように見えるのだろうか。

僕たちの間から、恋人のような甘い空間は流れていない。

「嫌よ、こんな男。ただの童貞じゃない」

「な、どっ！？」

童貞だと！？

この女、僕の事めちやくちや言いやがる。

それもこんな公の場で言うなんて。

「お前、適当に言うなよ！」

「あら、違ったの？」

「ち、違うわけじゃないけど……」

「なら、合ってるんじゃない」

完全に瀬々羅木は僕の顔で判断したたる。

確かに僕はこの性格と、特に最近は怪奇事件に見舞われ、それどころじゃない。

今だってお前の怪奇事件に付き合ってるというのに。

「ほら、何か注文しなさいよ」

すると瀬々羅木は僕にメニューを渡してきた。

そう言えば、瀬々羅木はご飯とか、食べられないんだっけ……。

すっかり忘れていたが、彼女には胃がないのだ。

どうやらその様子だと、またお腹は空いていないようだ。

僕は彼女からメニューを受け取った。

「じゃあ、チヨコレートパフェで」

「かしこまりました。……へえ、甘い物好きなんだ。覚えとこ」

霞ヶ原はそう最後に呟くと、厨房へ帰っていった。

瀬々羅木は頼杖を付きながら、窓辺から空を眺めていた。

僕たちの間に沈黙が続いた。

それを破ったのは、パフェを運んできた霞ヶ原だった。

「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ」

「ありがとう」

僕が礼を言っていると、彼女は礼儀正しく頭を下げた。

彼女は次のお客さんの接待をしていたため、もう僕たちのテーブルに来る事はなかった。

僕がパフェを食べ終わるのを、ただ無言で瀬々羅木は待っていた。

彼女は今、何を考えているのだろうか。

僕のパフェを美味しそうだな、とか思ってるのか。

僕には彼女の思考が全くわからなかった。

食べ終わると、僕は勘定を済まして店を出た。

外は暗くなっていたため、僕たちはここで解散した。

去り際に明日の事を言うのを忘れていたため、彼女の名を呼んだ。すると彼女は反応が遅かったが、ちゃんと振り向いてくれた。

「明日も今日と同じで」

「わかったわ」

彼女は相変わらずの口調だった。

だから気付きにくいだが、彼女には秘めた思いを抱えている。

僕はとりあえず彼女の胃の事なんかよりも、彼女の思いを知りたかった。

3話：ひじり真

5月5日（火）

今日は瀬々羅木のほうが、僕より早く来ていた。

瀬々羅木は今日も”清楚”な格好だった。

薄黄色のギンガムチエツクのワンピースに、白のサンダル姿だった。

「今日は私のほうが早かったわね」

「そう、だね」

瀬々羅木はそう言うと、少し微笑んでいた。

普段あまり笑わない彼女だったから、その表情はとても新鮮だった。

今日もまた通路は短かった。

これは无邪志さんが待っているという合図だった。

部屋には白狐も待っていた。

「リンさん！」

白狐は僕を見つけると、しがみ付いて来た。

どうして彼女はここまで僕に懐いてしまったんだろう。

「よお。今日、あなたの胃は返って来る」

「ホントですか？」

「ああ。但し、赤裸々に話してもらおうか」

无邪志さんがそう言うと、瀬々羅木は表情を険しくさせた。

やっぱり、彼女は何か隠している。

それを无邪志さんも感じていた。

すると无邪志さんはいつもはめていた黒の手袋をすつと外した。

その右手には黒い刻印が刻まれていた。

「それとも、オレがあんたの心臓をえぐらなきゃいけないのか？」

それでも黙ったままの瀬々羅木だった。

でもあの手は痛すぎる。

体験した事がある僕は、咄嗟に彼女に忠告した。

「止めといたほうがいい。あの手は痛い」

「お前は経験済みだからな」

无邪志は何だか楽しそうに話していた。

僕の顔は思ってたよりも真剣だったのだろう。

瀬々羅木は重い口をようやく開けた。

「要らない、って言った」

「何をだ？」

无邪志さんは瀬々羅木との距離を縮めた。

そして彼女の耳元で囁いた。

彼女は相変わらず、冷静に話した。

「胃を」

彼女の口から告げられた真実に、僕はただ驚くばかりだった。

无邪志さんはわかっていたように頷くと、また質問をした。

「誰にだ？」

「あの、狛犬に」

すると无邪志さんは彼女から離れた。

そして右手を彼女の心臓に近づけた。

また无邪志さんは質問を始めた。

「何故だ？」

「…幸せになれると、思ったから…」

すると彼女の目からは涙が溢れてきた。

无邪志さんは真剣な眼差しで彼女を見つめた。

構えた右手を解こうとはしない。

瀬々羅木は涙しながら話し続けた。

「家が…お金が無くて、だから、食費でさえしんどくて…。ご飯、
食べなかつたら、少しはゆとりが出来ると思って…」

僕はようやく彼女の私生活が見えたと思った。

本当は彼女を私生活を知りたくて少しわくわくしていたが、僕が思

つていたような生活ではなかった。
むしろ聞いてしまつて申し訳ない気持ちになつた。

无邪志さんは、それでも彼女に質問をする。

「だけど、あんたは返してほしいと願つた。何故だ？」

「食事を、したくなつた。…食べる幸せが、ほしくなつた……」
彼女は本心から話していた。

すると无邪志さんはふつと微笑んだ。

「だよ、狛犬さん」

无邪志さんは心臓に構えた右手を解いた。

そして狛犬に話しかけると、彼女の後ろから現れた。

狛犬はそのまま彼女の首を絞めた。

「うっ……！」

彼女は苦しそうな声を上げた。

无邪志さんは右手を狛犬に向けた。

「抵抗すれば消す」

その言葉に恐怖心を抱いた狛犬は彼女の首から手を離した。

瀬々羅木はその場で倒れこんだ。

僕はすぐさま彼女の元へ向かった。

「大丈夫か、瀬々羅木」

「だい、じょうぶ……」

彼女の目からは涙は止まらなかつた。

きつとずっと1人で抱え込んでいた。

「だから、勉強も頑張つて、推薦狙つて……。家族が喜ぶと、思ったから……」

瀬々羅木が僕に話した真実。

それはあまりにも残酷で、そしてあまりにも純粹だつた。

瀬々羅木はしばらく泣き続けていた。

僕はただ背中を摩る事しかできなかった。

无邪志さんが狛犬を捕らえた後、狛犬は普段の姿に戻つた。

狛犬はかなり幼い姿だった。

白狐といいこの狛犬といい、妖は皆幼いのか。

「黒狛だ」

狛犬はぶつきら棒に話した。

「ころごま、つて所か」

「その名前で呼ぶなっ！」

黒狛はムキになって、无邪志さんの髪の毛を引っ張っていた。しかし无邪志さんは動じていなかった。

「で、黒狛。彼女は理解したみたいだが」

「…わかった、返してやるよ」

黒狛は生意気にそう言うと、瀬々羅木の前に立った。

瀬々羅木はただ目の前にいる妖をまじまじと見つめていた。

「おい、返してほしいんだろ？」

「…ええ」

彼女の反応が鈍っていた。

黒狛は少し不機嫌そうだった。

「じゃあ、約束をしる。」もう、あんな事は願いません”つて」

「はい、もうあんな事、願いません」

すると黒狛は瀬々羅木の胃があるはずの部分に触った。

そして目を閉じて、何やら呪文を言い始めた。

瀬々羅木は眠気に襲われ、そのまま眠ってしまった。

黒狛は呪文が終わると彼女から離れた。

「すぐに目を覚ます」

瀬々羅木が眠っている間、黒狛は彼女の事を話した。

「どうやら4月23日に神社で黒狛に出会い、”食事をしなくても生きれる体にしてほしい”と願ったようだ。」

その願いを叶えるため、彼は彼女の体から胃を盗んだそうだ。

家族を養う方法は他にもたくさんあるはずなのに。

彼女はこの方法しか思い浮かばなかったみたいだ。

かなりの家族思いな少女、というわけだ。
僕も瀬々羅木を見習わなければいけない。
そう言えば、僕は自分の家族を知らない。
いないわけではないが、思い出せない。
僕こそ親孝行をすべきだと思った。

「ん…」

そんな事を考えていると、瀬々羅木の声が耳に入った。
見ると目を覚ましたらしい。

「大丈夫か」

僕は彼女にそう声を掛けた。

彼女からは頷きが返って来た。

すると无邪志さんは僕たちに話した。

「ここに長くいるのはしんどいから、もうお前たちは帰ったほうが
いい。オレも仕事がある」

「わかりました」

僕がそう言っただけで立ち上がるより先に彼女が立ち上がった。

「无邪志さん、本当にありがとうございます」

彼女が礼を言っくと、无邪志さんは少し照れながらも笑顔で返した。

「それと、黒豹さん。貴方にも感謝します。ありがとうございます」

黒豹自身、意外だったみたいで、驚いた表情をしていた。

彼女は穏やかな表情を浮かべ、黒豹に一例をした。

「貴方には”食事をする大切さや楽しさ”を学びました」

彼女は律儀だった。

僕が無邪志さんに助けてもらった時は、ただ礼を言っただけだった。

これで彼とは関わらなくて済む、なんて事も思った。

なのに彼女は素直だった。

今回の事件は、瀬々羅木聖の生態をよく知れた瞬間だった。

僕たちはあの後、廃校を出た。

そしてそれぞれ家に帰った。

誰もいない家に帰った僕は、疲れを癒すためベッドに寝転んだ。すると携帯電話のランプが光っているのが見えた。

画面を開くとメールが1件届いてきた。

『明日、東雲燐に礼も兼ねて付き合っしてほしい所がある』
絵文字も可愛げも無いメールは瀬々羅木からだった。

僕も『了解』とだけ送った。

明日のためにも今日は早めに寝よう。

僕はそう思い立ち、すぐお風呂場へ向かった。

4話：ひじり終

5月6日（水）

今日で長かったゴールデンウィークは終わり。

そして今日は瀬々羅木から誘われて街に出ている。

待ち合わせ場所は相変わらず同じだった。

今日は瀬々羅木のほうが遅かった。

「待ったかしら」

「うっん、今来たところ」

「そう。今日は東雲燐、貴方に付き合ってほしい場所があるの」

彼女に連れて来られたの場所はバイキングだった。

「1000円で食べ放題なのよ」

彼女は昨日、胃が戻ったばかりだ。

今まで食さなかった分、空腹なのだろう。

僕は彼女に付き合った。

「今日は私が奢るわ」

彼女の提案に僕は戸惑った。

家は貧乏だと昨日僕に告げたのに。

断ろうと口を開いたが、彼女が話すほうが早かった。

「東雲燐には迷惑かけたから、ちょっとしたお礼よ」

そう言われると断れなくなった。

僕は素直に彼女のお礼を受け取った。

でも、2000円で済ます所は彼女らしいとも思った。

彼女の盆には山盛り一杯の食材が乗っていた。

「そんなに食えるのか？」

「ええ、余裕よ」

おそらく彼女は細身の割には大食いなのだろう。

僕は彼女の食欲に呆気にと取られていた。

周りからすれば、僕たちは恋人同士に見えるのだろうか。それともただの主従関係に見られているだろうか。

「東雲燐の盆に乗ってるそれ、美味しそうね。私にも頂戴」

彼女は有無も言わず、僕の盆から食材を奪っていく。

やっぱり僕たちはただの主従関係のようだ。

でも、以前に比べて瀬々羅木は楽しそうに笑うようになった。

僕の中の彼女のイメージが、ミスティアスから純粹で家族思いの女の子に変わっていた。

どこにでもいる、普通の女子高校生。

そう思っただけを見ると、ふいに目が合った。

笑いかけると、彼女は少し照れながら微笑んだ。

怪奇現象は、まだまだ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3148q/>

かれと怪奇な物語

2011年1月26日13時46分発行